

氏 名 なが た くろ かわ よし こ
長 田 (黒 川) 嘉 子
学位(専攻分野) 博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号 論 教 博 第 133 号
学位授与の日付 平 成 19 年 9 月 25 日
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目 心理臨床における遊ぶことの空間
——移行対象概念の<不確かさ>をめぐって——

論文調査委員 (主 査)
教 授 伊 藤 良 子 准教授 皆 藤 章 准教授 角 野 善 宏

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、言葉をもたない存在として生まれた乳児が、どのように固有の心的世界を築いていくのかとの問いのもと、Winnicott, DW の移行対象概念を軸にして、心理臨床における遊ぶことの空間についての研究がなされた。

第1章では、子どもが夢中になっている様子や遊びに関心を向けていることの意味を探究し、言葉をもたない存在が言葉をもつ存在になることを考察するという本論の目的が詳述された。すなわち、Freud, S が観察した「いない—いた遊び」を取り上げ、在—不在、遊び—現実という対の<あいだ>に注目して、移行対象概念を手がかりに再検討することによって、言葉が第3の存在として捉えられる可能性が示された。

第2章では、乳幼児が示している移行対象・移行現象行動についての調査研究によって、移行対象概念の捉え直しがなされ、Winnicott の移行対象概念には、母子関係や情緒発達過程における発達の視点と体験の中間領域における現象的視点の2つの視点が非対称にあることが示された。移行には、母子分離や無統合から統合への過程など方向性をもつ移行と、目的をもたない移ろい体験としての移行が含まれており、この体験が<不確かさ>を本質とする「遊ぶこと」につながる事が示唆された。

第3章では、これまでの移行対象研究の整理がなされた。従来の研究では、移行対象の同定基準と文化差の問題が取り上げられ、日本では狭義の移行対象発現率は低いとされている。この点について、就眠時の母子相互作用に注目することによって、就眠時行動の意味を、Stern, DN の自己調節的他者の概念を用いて検討し、他者とともにある自己調節という観点から理解されることが示された。

第4章では、幼児の就眠時行動と幼稚園での情緒的体験との関連について、調査による検討がなされた。従来の移行対象研究では、移行対象の「変わらなさ」が大切な要素と考えられてきたが、他者が介在する調節的交流は、そこに<不確かさ>が内包されているからこそ、幼児の自己調節機能の成熟が可能になること、母親と身体的距離をとり、確実さから手を放すことが、言葉を介した「話すこと」へと関係性が移行されることが示された。

第5章は、3ヶ月の男児とその母親を対象とした観察研究である。乳幼児早期からの関係性はその後の母子関係や対人関係の基盤となる重要性をもち、それゆえ、乳児も母親も関係性の呪縛に囚われてしまう危険性がある。互いに独立した心的世界を持つ存在としての関係性のあり方について、泣きや微笑といった乳児の原初的反応に対する、母親の「分からない」体験や「ずれ」の体験をもとに検討され、わからなさや曖昧さを抱えることの重要性が示された。

第6章では、小児科で多く訴えられる「言葉の遅れ」という問題について、事例研究がなされた。小児科という医療の場は心理臨床との接点となり得るが、そこでの発達相談に訪れた2歳3ヶ月の男児とその母親の事例を取り上げ、男児と著者の前言語的交流について、視線の交わり、共同注視という観点から検討された。微妙な情動調律の様相や男児の描画をもとに、クライアントとセラピストのあいだが言葉の生まれる可能性空間となることが例証された。

第7章では、第6章で取り上げた男児が、発達検査課題の形合わせに夢中になったことに注目し、自閉症児が抱える対人

関係の困難さと言葉の本質について考察された。「自分」と「自分でない」の区別が生まれ、自らの体験を言葉によって抱き取り、他者と言葉で体験を共有するに至るには、Winnicottの言う錯覚による「ただ在ること」が許されなければならない。ただあることが許されていず、「連続性の穴」(Tustin, F)を抱える自閉症児にとって、その「穴」を埋めるためには、自らの体験を映し返してくれる他者、自己の存在に先立った他者、内的現実に含まれている外的現実が根本的に不可欠であることが、事例を通して明らかにされた。

第8章では、遺伝性疾患を持つ女兒とのプレイセラピー過程を提示し、身体を持った主体として生きていくという課題に対して、プレイセラピーの役割が検討された。本事例は、自分の存在の根源にかかわり、かつ自分の存在を他者につなぐ関係性にかかわる遺伝性疾患と、それに伴う発達の遅れについて、女兒自身が、自らの置かれた状況や問題に対して漠然と抱えていた「わからなさ」を、得体の知れ得ない「おぼけ」として向き合っていく過程として考察された。また、プレイセラピーという場が、遊びと現実のあいだをクライアントとセラピストのあいだで行ったり来たりする移行空間となり、その中でさまざまな情緒的体験を感じる存在から、主体的に体験を創り出す存在へと移行することが示された。

第9章では、発達の遅れをもつ小学校3年生女兒との中学3年生までの6年間にわたるプレイセラピー過程が検討され、心理療法における遊ぶことについての考察が深められた。遊ぶことは、子どもにとっても容易いことではない。残虐性や破壊性を含めた遊びのプリミティブ性が表出されるとき、クライアントにとっても、セラピストにとっても危うさを伴うが、心理療法においては、プレイ空間という枠組みとセラピストの存在が基本的な守りとなって、クライアントは原基的なテーマと取り組むことになる。この共同作業のプロセスは、瞬間の連続であり、危うさだけでなく、＜不確かさ＞という遊ぶことの本质に触れることになる。

以上の点から、心理臨床における遊ぶことの空間には、さまざまな＜不確かさ＞が潜在しており、それゆえにこそ、常に何かが創造される可能性がそこに秘められていることが明らかにされた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、言葉をもたない存在として生まれた乳児がどのように固有の心的世界を築いていくか、Winnicott, DWの「移行対象」概念を基盤にして、心理臨床における「遊ぶこと」の空間について探究されたものである。

移行対象概念には、母子関係や情緒発達過程における発達の視点と、体験の中間領域における現象学的視点の2つの視点があるとの重要な指摘のもと、無統合から統合への方向性をもった移行と、目的をもたない移ろい体験としての移行の相違に注目し、この体験が＜不確かさ＞を本質とする「遊ぶこと」につながるという独自の観点が呈示された論文であり、以下の点が評価された。

第1章では、子どもが遊びに夢中になっている様子や遊びに関心を向けていることをめぐって、言葉をもたない存在が言葉をもつ存在になることについて考究するという本論の目的が示された。Freud, Sの「いない—いた遊び」の観察を、移行対象概念から再検討し、在—不在、遊び—現実の＜あいだ＞に、第3の存在として言葉が生まれるという重要な視点について論述された。

第2章では、乳幼児の保護者・保育者に対する質問紙調査・面接調査研究によって、母親を必要としている子どもの方が感情耐性があるという、従来の理論研究とは異なる興味深い結果を得、移行対象概念の多様性や豊かさが実証的に明らかにされた。次いで第3章では、先行研究の整理がなされた。従来の研究では、移行対象の同定基準や、欧米に比して日本では狭義の移行対象発現率が低いという文化差の問題が主に取り上げられてきたが、この点について、就眠時の母子相互作用に注目し、就眠時行動の意味を、Stern, DNの「自己調節的他者」の概念を用いて検討し、他者とともにある自己調節という重要な観点が提示された。さらに第4章では、質問紙調査をもとに幼児の就眠時行動と幼稚園での情緒的体験との関連が検討された。従来の研究では、移行対象の恒常性が大切な要素とされているのに対して、他者が介在する調節的交流は＜不確かさ＞を内包し、それゆえに幼児の自己調節機能の成熟が可能とされるという重要な指摘がなされた。また、第5章は、3ヶ月の男児とその母親の観察研究である。互いに独立した心的世界をもつ存在としての母子のあり方に関して、乳児の泣きや微笑等の原初的反応に対する母親の「分からなさ」や「ずれ」の体験をもとに検討がなされ、分からなさや曖昧さを抱えることの重要性が抽出された。

第6章、7章は、小児科における発達相談に訪れた2歳3ヶ月の男児とその母親の事例研究である。6章では、言葉の遅れの問題について、男児とセラピストとの前言語的交流の詳細が、視線の交わり、共同注視という観点から検討され、男児の微妙な情動調律の様相や描画をもとに、両者の〈あいだ〉は言葉が生まれてくる可能性空間となることが例証された。さらに第7章では、男児が、発達検査課題の形合わせ、つまり「穴」に夢中になった場面の推移に注目し、自閉症児が抱える対人関係の困難さについて考察された。「自分」と「自分でない」の分離や、自らの体験を言葉によって掘り取って他者と共有することは、Winnicottの言う錯覚による「ただ在ること」が許されて可能になる。それが困難なため、Tustin, Fの言う「連続性の穴」を抱える自閉症児にとって、この「穴」を埋めるためには、自らの体験を映し返してくれる他者、自己の存在に先立つ他者が不可欠であり、その存在の重要性が明らかにされた。第8章では、遺伝性疾患をもつ女兒とのプレイセラピー過程の事例研究により、病気について適切な説明がされてこなかった女兒が、プレイセラピーの場において、主体的に体験を創り出す存在へと移行するとともに、遺伝性疾患についてその「わからなさ」を得体の知れない「お化け」として向き合っていく過程となったことが示され、身体疾患をもつ子どもに対するプレイセラピーの重要な機能が明らかにされた。第9章では、発達の遅れをもつ女兒の6年間にわたるプレイセラピーの事例研究により、心理療法においては、残忍性や破壊性を含めたプリミティブ性が表出され、場の守りの中で原基的なテーマと取り組まれることになるが、それは、瞬間と危うさの連続であり、〈不確かさ〉という「遊ぶこと」の本質にこそ触れる過程であることが示された。

以上のように、本論文は、質問紙調査研究、観察研究、事例研究等を積み重ねた重層的な研究から、独自の視点がコンパクトに分かり易くまとめられて呈示されており、子どもだけでなく成人の心理療法にも貢献し得ると高く評価された。しかし、先行研究の各理論の違いを文献を丁寧に引用しつつ明確にされるという作業が不十分であること、重篤な障害に対して心理的アプローチでどこまでやれるかについての論述がもっと必要であったこと等の指摘がなされたが、それらは、博士論文としての価値を損なうものではなく、今後のさらなる研究の発展を期待するものと考えられた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものとして認める。また、平成19年7月25日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。